Ⅳ　家庭　２年次の成果と課題

1　成果

(1)　生活事象を科学的に見つめ，「対話」を通して学びにつなげる省察の工夫

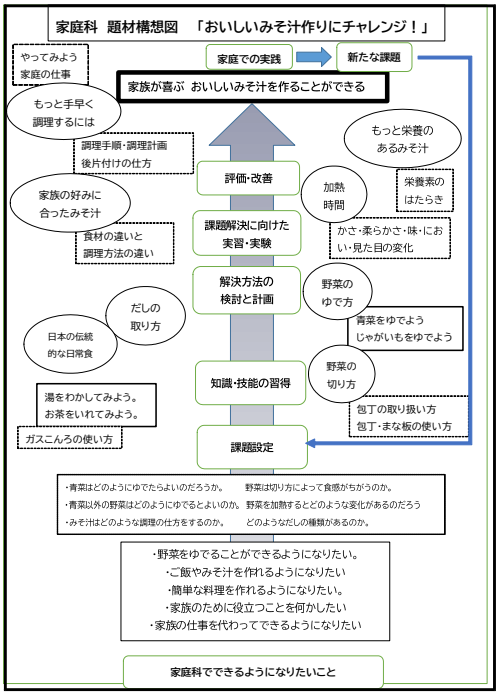
家族のために「おいしい」みそ汁を作りたい。子どもたちのめあてには「おいしさ」を目指すものが多くあった。しかしながら「おいしさ」の基準は多様であり，感じ方も人それぞれに異なる。同様に「やわらかさ」や「味の濃さ」などの感じ方を大勢で共有することが難しい。そこでそれぞれの目指す「おいしさ」とはどんなことなのか，意見を交流する場を設けたり，簡単な尺度を提示して自分の感じ方がどの段階に当てはまるのかを数値化させたりするようにした。自分たちの目指す状態に調理するために，野菜のゆで方や切り方，加熱の仕方などの「見方・考え方」を働かせている姿が見られた。実習の結果と自分のめあてとの比較を図り，省察を行うと同時に、他のグループの結果との比較をすることで，全体での「対話」を通して学習を深めることにつながった。

家庭科の学習において基本的な知識及び技能を身に付けておくことは，よりよい生活を工夫する上で不可欠である。子どもたちの生活経験や他教科における既習内容を結び付けることができるように，内容を想起させたり，根拠を考えさせたりする場を設定することにより，実感を伴って知識及び技能を習得することができるようにした。例えば、理科で学習した「沸騰」や「蒸発」「熱の伝わり方」といったキーワードから，野菜をゆでる際の水の量や火加減などについて考えさせた。子どもたちからは「火をしっかり通すには薄く切るとよいのではないか」「食感を残すには厚みがある方がよい」「水を多く入れすぎると沸騰までの時間がかかるし，ガス代もかかる」「蒸発する分の水を足して量を決めないといけない」などの考えが出された。本時の学習だけで終わらない，次の学習につながる考え方として，省察の場面で発言を取り上げ，全体で確かめ合うことで，より深い理解につなげることができた。

(2)　生活をよりよく工夫するために，日常生活の中から課題を設定し，方法を考えて課題解決を図ることができる題材構成の工夫

家庭科の目指す「家庭での実践」に学びをつなげていくためには，子ども自身が学ぶ目的意識をもち，家族の一員として役割を果たす姿を見据えて学習に取り組むことが必要である。子どもが自身の生活を見直し，できるようになりたいことや改善したいことを明確にした上で，自分の課題を設定して，様々な解決方法を考え，実習を通して，課題解決の力を身に付けることができる題材構成を工夫した。

第５学年の「わたしと家族の生活」「はじめてみようクッキング」「やってみよう家庭の仕事」「食べて元気に」の内容を複合的に扱った。子どもたちは調理器具や用具の基本的な使用方法や調理の仕方，調理計画の立て方などを学習し，実習や実験といった家庭科の「見方・考え方」を働かせた体験的な学習を通して，調理の仕方や手順についての理解を深めることができた。家庭科の目標である「家庭での実践」を学びのゴールとして位置付け，常に「家庭で行うなら」「家族に作るなら」というイメージを子どもたちにもたせながら学習を進めていく展開はストーリー性があり，子どもの学習意欲の持続にもつながった。



〈題材構想図〉

2　課題

体験的活動を評価・改善し，自己の学びや成長を自覚することができる省察の在り方

家庭科の学習では調理や製作等の実習や観察，調査，実験などの実践的・体験的な活動を通して，実感を伴って理解させることが求められる。これまでの学習展開の中では，省察に当たる時間を１単位時間の中に設定し，自己や他者との「対話」を通して行ってきた。しかし，体験的な活動の中で生まれた気付きや考えが，活動後の省察の場で生かされていたとは言えない。それらを子ども自身に意識させる教師の関わり方や，学びの記録としてのワークシートなどの手立てを工夫し，学びや成長を自覚することができる省察の在り方を探っていきたい。